

αMプロジェクト 2023-2024 企画 プレスリリース

時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度、gallery αMでは、市ヶ谷へ移転後の最初の展覧会として、αMプロジェクト2023-2024「開発の再開」を開催いたします。つきましては、以下に展覧会の概要をお知らせいたしますので、ご高覧いただけましたら幸いです。

αMプロジェクト 2023-2024

開発の再開

Redevelopment of Development

ゲストキュレーター：石川卓磨（美術家・美術批評）

2023年5月20日（土）～2025年2月8日（土）

参加作家：平山昌尚、近藤恵介、Sabbatical Company、松平莉奈
奥村雄樹、片山真妃、大石一貴、Multiple Spirits

協力：平和紙業株式会社、竹尾



デザイン：岡田和奈佳

vol. 1 平山昌尚

2023年5月20日（土）～7月15日（土）

vol. 2 近藤恵介

2023年7月29日（土）～10月14日（土）
（夏季休廊：8/13～8/28）

vol. 3 Sabbatical Company

2023年10月28日（土）～12月23日（土）

vol. 4 松平莉奈

2024年1月20日（土）～3月16日（土）

vol. 5 奥村雄樹

2024年4月13日（土）～6月15日（土）

vol. 6 片山真妃

2024年6月29日（土）～9月7日（土）
（夏季休廊：8/11～8/26）

vol. 7 大石一貴

2024年9月21日（土）～11月16日（土）

vol. 8 Multiple Spirits

2024年11月30日（土）～2025年2月8日（土）
（冬季休廊：12/22～1/6）

主催：武蔵野美術大学 運営：武蔵野美術大学αMプロジェクト運営委員会

会場：gallery αM ギャラリーアルファエム

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

日・月・祝休 入場無料 12:30～19:00

<https://gallery-alpham.com>

※会期及び開廊日時の変更並びに入場制限等の対応を検討する場合がございます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■展覧会に関するお問い合わせ、取材依頼等は下記までお願いいたします■

gallery αM ギャラリーアルファエム

alpham@musabi.ac.jp

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

※2023年度より馬喰町から移転いたしました。お手数をおかけいたしますが、住所録等の更新をお願い申し上げます。
また、電話番号、FAX、Eメールアドレスに変更はございません。

gallery αM

開発の再開

現代は、気候変動、感染症、戦争、自然災害、テクノロジーなどによって、永続すると信じられていた日常が大きく変動し、将来の予測が困難な激動の時代となりました。この時代の現象には、ネガティブなものばかりではなく、不平等、差別、暴力を強いてきた社会や構造に抗議し変化を与えていく社会運動も含まれています。ソーシャリー・エンゲイジド・アートやアクティビスト・アートなどは、社会に直接的に関わり、そのような時代に対応したアートだといえます。しかしそのようなアートと社会の関わり方を見ると、そこにはさまざまな障害、温度差、矛盾、認識不足が存在しています。そのため私は、社会に直接関与しようとするアートのアプローチに限定せず、造形的表現や美術史においても、この時代を乗り越えるための新しい認識や方法へのアップデートが重要だと考えています。

「開発の再開」というタイトルは、以上のような前提に向けられています。そして、開発であれ、再開であれ、そこではなにかしらの「新しさ」が関わることを意味しています。

しかし、哲学者・美術批評家であるボリス・グロイスが指摘するように、この数十年間アートで「新しいことをするのは不可能である」という言説や認識が広く影響力をもってきました。「アートの終焉」(アーサー・C・ダントー)の言説は、この影響の歴史的な起点になっています。ここでの「終焉」とは、アートという営為自体の終焉を示しているのではなく、「アートの終焉」以後のアートが存続していくことを前提にしています。つまりアートは終わったままこれからもずっと続いていく。そのため「新しいことをするのは不可能である」という悲観的表明は、美術史の重荷や緊張関係から解放されて、アーティストが個人個人の表現活動を自由に展開できればいいという楽天的な気分を含んでいます。

では、この激動の時代において、アートは、「新しさの終わり」や「アートの終焉」に留まり続けていいのでしょうか。冷戦体制崩壊後の時代を象徴する「歴史の終わり」(フランシス・フクヤマ)という歴史認識に、批判的な検討の必要性があるとされているように、「新しさの終わり」という認識から批判的に脱却する必要があるのではないのでしょうか。

ただし、これまでのトレンドと差異をつくり出すような新卒のトレンドを提示したいわけではありません。なぜならそれは結局トレンドの構造を何も変えることがないからです。むしろ私たちは、これまであまりにも一方向的(過去→現在)な「新しさ」を信じ、限定的な価値基準で「新しさ」を認めてきたのではないのでしょうか(アートの新しさとは、作品の様式や美術館の内部だけにあるものなのか)。

「開発の再開」とは、「新しさ」をつくり出す開発という概念自体を、批判的に再開する試みです。また、開発は結果ではなく過程であり、実験、研究、調査という行為が不可欠です。再開は、開発がもつ拡大・拡張の一方向的なベクトルとは異なる時間的・空間的な展開を意味します。本展覧会シリーズの8組のアーティストやコレクティブには、テーマや表現形式に共通性がないとしても、それぞれが歴史や方法に関わる研究・実験的活動やコンセプトをもっています。それを駆動しているのは必ずしも作品や展覧会に成果が集約されないモチベーションかもしれません。展覧会や作品は、結果としてわかりやすく「新しさ」を示さないかもしれません。しかし、この投げかけによって「開発の再開」とは何かを考える契機が鑑賞者にも生まれるのではないかと考えています。

石川卓磨 (美術家・美術批評)

ゲストキュレーター プロフィール

●石川卓磨 (いしかわ・たくま)

1979年千葉県生まれ。美術家・美術批評家。芸術・文化の批評、教育、製作などを行う研究組織「蜘蛛と箒」を主宰。近年の主な論考に「パーティーの後で」『中崎透 フィクション・トラベラー』図録(水戸芸術館現代美術センター、2022)、「寄生し、介入する旅するリサーチ・ラボラトリー評」『丸亀での現在』図録(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022)、「アフリカ系アメリカ人として生きる「怯え」と文化的混血性。ラシード・ジョンソン「Plateaus」レビュー」(Tokyo Art Beat、2022)、「特権的な眠り——福永大介「はたらきびと」展」『月刊アートコレクターズ2021年1月号』(生活の友社、2021)など。

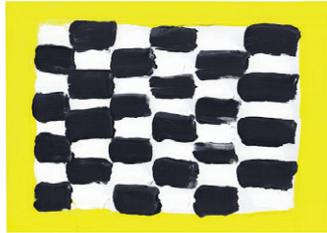
作家プロフィール (会期順)

●平山昌尚 (ひらやま・まさなお)

1976年兵庫県生まれ。絵画、パフォーマンスなど。主な個展に「町の絵」clinic (東京、2022)、「NFT」NADiff Window Gallery (東京、2022)、「1-4」VOILLD (東京、2020)、「カード」TALION GALLERY (東京、2018)、「Book Show」Nieves (チューリヒ、2017) / ユトレヒト (東京、2017) など。主なグループ展に「平山昌尚 x 五月女哲平」OBG eu. (兵庫、2022)、「101 to 101」nidi gallery (東京、2021)、「楽観のテクニク」BnA Alter Museum (京都、2020)、「思考するドロ잉」札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館 (北海道、2019)、「#12 Post-Formalist Painting」statements (東京、2017)、「Sylvanian Families Biennale 2017」XYZ collective (東京、2017) など。



《ART (9493)》
2023年 | 紙にアクリル | 21×29.7cm



《The Family of the Artist (9425)》
2022年 | 紙にアクリル | 21×29.7cm



《焦げたパン (9259)》
2022年 | 紙にアクリル | 21×29.7cm

●近藤恵介 (こんどう・けいすけ)

1981年福岡県生まれ。2007年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。画家。近年は、「日本画」の方法から絵画の別のあり方を考え、展覧会や紙媒体を中心に作品発表を行なっている。近年の主な個展に「絵画の手と手」LOKO GALLERY (東京、2022)、連続展「卓上の絵画」(MA2 Gallery など、2017-2020)。主な二人展に「あっけなく明快な絵画と彫刻、続いているわからない絵画と彫刻」川崎市市民ミュージアム(オンライン、2023) / LOKO GALLERY (東京、2023)、「譚 近藤恵介・古川日出男」LOKO GALLERY (東京、2019)。主なグループ展に「所在-游芸」kenakian (佐賀、2021)、「VOCA 展 2019 現代美術の展望-新しい平面の作家たち」上野の森美術館 (東京、2019) など。作品集に『12ヶ月のための絵画』(HeHe、2014年)、論文に「卓上の絵画、線の振幅」(佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集 第4号、2021年)など。2020年より文学ムック『ことばと』(書肆侃侃房)の装画・挿絵を担当。



《ひとときの絵画》
上:2022年 | 岩絵具、膠、鳥の子紙 | 15.6×28.1cm
下:2022年 | 水干、膠、墨、鳥の子紙 | 17×26cm
*安田靉彦《風来山人》の引用
撮影:柳場大



《ひとときの絵画》
左:2020年 | 染料、絹 | 45.5×37.7cm
右:2022年 | 岩絵具、水干、膠、墨、雅邦紙、糊 | 45.3×28.6cm
*小林古径《瓶》の模写(部分)



《ハンカチ》
2021年 | 染料、絹 | 39.9×39.9cm
撮影:柳場大

● Sabbatical Company (さばていかるかんぱにー)

杉浦藍、益永梢子、箕輪亜希子、渡辺泰子の同世代 4 人により 2015 年に結成されたアーティスト・コレクティブ。安息日を語源とし、専門性を磨く創造的な長期休暇を意味する Sabbatical と、共にパンを食べる仲間を語源とする Company を組み合わせコンセプトとし、プロジェクトを主体に活動を行う。主な個展に「OR We are still chatting.」TALION GALLERY (東京、2022)、「OR Have a good day.」Maebashi Works (群馬、2016) など。主なグループ展に「ところざわ アートのミライ」西武鉄道所沢駅等 (埼玉、2023)、「3331 Art Fair 2017 -Various Collectors Prizes-」アーツ千代田 3331 (東京、2017) など。



個展「Or We are still chatting.」(2022年)
TALION GALLERYでの展示風景
撮影:木奥恵三
提供:TALION GALLERY



『#07 Sabbatical_Birds』
2019年 | ポートランドで制作したZine



《Air Pump》
2017年 | MV

● 松平莉奈(まつだいら・りな)

1989年兵庫県生まれ。京都府在住。日本画の領域で培われた技術や画材を咀嚼しながら、他者について想像することをひとつの主題とし、人物などを中心とする具象画を制作している。近年の主な個展に「蚕」KAHO GALLERY (京都、2023)、「うつつのならひ 絵描きとデジタルアーカイブ」ROOMシアター 京都 (2020)、「悪報をみる—『日本霊異記』を絵画化する—」KAHO GALLERY (京都、2018) など。主なグループ展に「それを故郷とせよ(手が届く)」TALION GALLERY (東京、2022)、「Slow Culture」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA (2021)、「ないじえる共創ラボ展 時の束を披く 古典籍からうまれるアートと翻訳」国文学研究資料館 (東京、2021) など。



《鶴の解体》
2017年 | 紙本着色 | 181.7×227.3cm
撮影: 乃村拓郎



《解毒の作法》
2021年 | 紙本着色 | 53×72.7cm (20P)
個人蔵



《聖母子》
2022年 | 紙本着色 | 150×168cm
撮影: 乃村拓郎
協力: カトリック玉造教会
天祐寺蔵

● 奥村雄樹 (おくむら・ゆうき)

1978 年青森県生まれ。主な個展に「彼方の男、儂い資料体」慶應義塾大学アート・センター (東京、2019)、「29,771 days -2,094,943 steps」LA MAISON DE RENDEZ-VOUS (ブリュッセル、2019) など。主な二人展に「奥村雄樹による高橋尚愛」銀座メゾンエルメス フォーラム (東京、2016) など。主なグループ展に「あいち 2022」愛知芸術文化センター (2022)、「July, August, September」St. Apernstrasse 13 (ケルン、2021)、「Un-Scene III」WIELS (ブリュッセル、2015)、「MOT アニュアル 2012 風が吹けば桶屋が儲かる」東京都現代美術館 (2012) など。



《彼方の男》
2019年 | HDビデオ | 116分15秒
Courtesy of the artist and MISAKO & ROSEN.



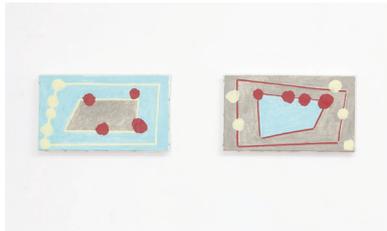
《7,502,733》
2021-2022年
国際芸術祭「あいち2022」(2022年)
愛知芸術文化センターでの展示風景
撮影: ToLoLo studio
© Aichi Triennale Organizing Committee.
Courtesy of the artist and MISAKO & ROSEN.



個展「彼方の男、儂い資料体」(2019年)
慶應義塾大学アート・センター アーカイヴでの
閲覧風景
撮影: カロワークス
提供: 慶應義塾大学アート・センター
Courtesy of the artist and MISAKO & ROSEN.

● 片山真妃 (かたやま・まき)

1982年東京都生まれ。同地在住。2006年多摩美術大学油画科卒業。近年の個展に「花桃／ポップコーン」second 2.(東京、2022)、「F3(a<b),P6(c<d),M12(e<f):b=c,d=e」XYZ collective (東京、2021)、「Solstices & Equinoxes for TOKYO & Four cities in 2021」chicane.space (オンライン、2021)、「鳥と鼠と20の茶色など」XYZ collective (東京、2018)、「キュリー夫人年表」Maki Fine Arts (東京、2016)など。主なグループ展に「ワールド・クラスルーム:現代アートの国語・算数・理科・社会」森美術館 (東京、2023)、「VOCA 展 2014 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」上野の森美術館 (東京、2014) など。



《M3M3#4》
2021年|キャンバスに油彩、紙|各16×27.3cm(2点組)



《M6F4》
2021年|キャンバスに油彩、紙
(上から)24.2×33.3cm、24.2×41cm



《F10P8P4》
2020年|キャンバスに油彩| (左から)53×45.5cm、
45.5×33.3cm、33.3×22cm

● 大石一貴 (おおいし・かずぎ)

1993年山口県生まれ。彫刻家。自他の持つ断片的な経験の時空間と、それを知覚させる物理的な事象に着目し、不確実な物事の隙間と余白、間(ま)にまつわる彫刻・インスタレーション・映像・詩などのメディアで制作、発表を続けている。主な個展に「KAZUKI OISHI: For instance, Humidity」sandwich (CFP)(ブカレスト、2022)など。主なグループ展に「ARTISTS STUDIO第8期 Exhibition」ソノ アイダ#新有楽町(東京、2023)、「大韓民国ソウル特別市チュングウルジロ18キル25-2ムンヨンビル303号の三Qで2022年12月9日金曜日午後12時からはじまって2022年12月30日金曜日午後19時に終わる展示に紺野優希と大石一貴とユ・ジョンミンは参加する。」三Q(ソウル、2022)、「おなじみのうごき」Art Center Ongoing(東京、2022)、「Artists in FAS 2020」藤沢市アートスペース(神奈川、2021)、「WALLAby / ワラビー」銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM(東京、2020)、「群馬青年ビエンナーレ2019」群馬県立近代美術館(2019)など。



《街の流れ星》
2021年|2チャンネルビデオインスタレーション、粘土、木材、映像、詩、双眼鏡|6分30秒、サイズ可変



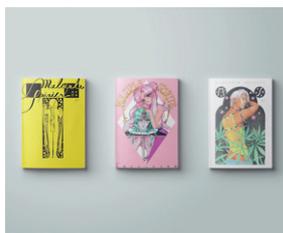
《惑星探査》
2022年|セメント、粘土、27インチモニターと光源映像、木の台、引力と斥力、乾燥、その他諸々
59.6×33.6×330cm



《For instance, Humidity》
2022年|粘土、水、ガラス瓶、金属、麻、乾燥、湿気
サイズ可変

● Multiple Spirits (まるちぶる・すびりつつ)

2018年にアーティスト・俳優の遠藤麻衣とキュレーター・批評家の丸山美佳によって、日英バイリンガルのクィアフェミニストの実践を目指すZineとして結成・創刊。ファンジンやウェブ記事を発行しながら、研究調査、展覧会、コラボレーション制作、トークイベント、翻訳など多岐に渡るプロジェクトを展開。セクシュアリティ、ジェンダー、人種、階級といった重なりあう差別解体を視野にいれ、様々な角度から芸術活動の研究と紹介をする。また、東アジアにおける芸術運動やクィアフェミニズム運動と雑誌メディアといった大衆メディアやアーカイブの関係性の調査を行い、2020年には、歴史的研究資料や雑誌と現代美術で構成した展覧会「When It Waxes and Wanes」Vereinigung bildender Künstlerinnen Österreichs (ウィーン)を企画、開催した。



『Multiple Spirits (マルスピ)』
左からvol.1、vol.2、vol.3



企画「When It Waxes and Waxes」(2019年)
VBKÖでの展示風景
撮影: Claudia Sandoval Romero



「ジェンダーワークショップ」(2020)
名古屋芸術大学での風景
撮影: 田村友一郎